【小特集　書院生の見た日中戦争】

東亜同文書院生が見た山西省新民会
――大旅行調査の教育的意義――

愛知大学非常勤講師、愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員　**広中　一成**

1．はじめに

日中戦争で、日本軍は中国大陸で手にした広大な占領地を支配するため、日本と関わりの深い中国人政治家や軍人、地元有力者を懐柔して現地に政権を作らせた。この政権は日本の戦争に協力したことから対日協力政権、あるいは日本側の意のままに操られたことから、傀儡政権と称される[1]。

これら政権は、日本軍の中国侵略の過程でできあがったのであり、統治組織としての正当性はなかった。よって、彼らは政権を翼賛する政治団体を結成して、政権を支持するよう現地住民に働きかけ、その存在を形の上で正当化させようとした。例えば、五族協和と王道楽土という満洲国の建国精神を根づかせるために発足した満洲国協和会や、協和会の流れを汲み、中華民国臨時政府（1940 年 3 月、華北政務委員会に改組）と表裏一体の国民組織を標榜した中華民国新民会、戦時下の上海周辺に発足した親日民衆団体を集めて成立させた中華民国維新政府の翼賛団体、大民会などがそれにあたる。このうち、本稿は新民会に着目する。

新民会[2]は、北支那方面軍特務部の成田貢少佐が、元協和会幹部の小澤開作や元満洲国外交部大臣の張燕卿（ちょうえんけい）らの協力を得て、中華民国臨時政府成立から 10 日後の 1937 年 12 月 24 日に北京で結成した。発足と同時に発表された「新民会綱領」によると、新民会は、新政権の護持と民意の暢達、産業の開発と民生の安定、東方文化と道徳の発揚、反共路線の参加、日本との提携実現と人類平和の貢献を基本方針とした。

新民会は北京に組織を統括する中央指導部、地方の省から県までの各行政区分に指導部を置き、中央指導部の指示のもと、各指導部が管轄する地域の民衆工作にあたった。

新民会の名にある新民とは、同会設立者のひとりである繆斌（みょうひん）が、朱子学を独自に解釈して編み出した思想で、中国古来の王道主義による統治の実現を目標とした。

新民会は発足当初、会の理想を前面に出して、組織の確立と会員の獲得を図った。その結果、組織は急拡大し、会の職員数が発足直後の数人から 1939 年度末までに 2338 人へと増え、地方の分会の会員数も 1939 年末に 67 万 4000 人に達した。

1940 年 3 月、新民会は北支那方面軍によって軍宣撫班と統合され、小澤開作など新民会で中心的役割を果たした幹部が去ると、以後は軍主導で運営された。

新民会は、日本軍や傀儡政権が占領地の民衆をどのように掌握しようとしたのか明

らかにするうえで検討に値する一例であり、これまでいくつかの研究成果がみられた。例えば、堀井弘一郎は、新民会の成立から敗戦により消滅するまでの経緯をたどりながら、同会の組織構成や、宣撫班との合併により組織の性格がどのように変容したのか明らかにした[3]。菊地俊介は、新民会にあった各種青年組織に着目し、彼らがどのように動員され、占領統治に寄与したか、一方で彼らは生き残るためどのように日本側に協力したかなど、日本軍占領下の民衆の複雑な実情について論じた[4]。

中国では、2000年代より郭貴儒、劉敬忠、張同楽らが、華北傀儡政権に関する体系的な研究のなかで、新民会について論じている[5]。特に郭貴儒は、河北省の新民会に焦点を当て、各行政組織にどれくらい新民会が介在し、親日教育や反共宣伝、経済統制を行ったのか分析している[6]。

このように、近年の新民会研究は、組織の全体像の把握から、各種運動、行政組織との関わりなど、より個別具体的なものになってきた。今後、より新民会の実像を明らかにするためにも、多面的な分析が必要となろう。

以上のような問題意識から、本稿ではアジア太平洋戦争期、東亜同文書院生が大旅行と称する現地調査に着目する。

東亜同文書院は、1901年、日中両国に有用な人材を育てることを目的に上海に設立された日本の専門学校である[7]。同校を設立した東亜同文会は、支那保全論に基づくアジア主義的思想を持った団体であった[8]。

大旅行とは、最終学年の書院生数人で班を組んで、設定したテーマに基づいて、2、3ヶ月かけて中国各地を調査に回る恒例行事である。これら調査の結果は卒業論文の代わりとなり、後に単行本として刊行された[9]。今日彼らの遺した記録は、戦前中国の事情を知る貴重な手がかりとなっている。

この大旅行では、いくつか新民会に焦点を当てた調査報告がある。そのうち、本稿では、第39期生の大旅行第七班（福田經・徳永速美・立見章三・田沼菊彌・齊藤〔齋藤〕忠夫・松城弘）による「昭和十七年度　大旅行調査報告書　華北に於ける政治建設状況――新民会工作を中心として――」[10]を取り上げる。その理由は、ひとつに、本報告書が新民会を調査したほかのそれよりも、比較的内容がまとまっていること。もうひとつは、山西省の新民会という、地方のより前線に近い地域の場合を例にしていることで、これまで充分に検討されていない、新民会の末端部分の実像がかいまみえることによる。

彼らは調査の過程で、日々の行動やそれに対する感想や意見をひとりひとりが日誌にまとめている[11]。本稿はこれら資料を駆使し、まず彼らが報告書作成までにどこを訪問し、誰と会い、どのような調査をしたのかたどる。そのうえで、彼らがどのような報告書を作成したか見ていく。これら検討をとおして、彼らが山西省の新民会をどのように分析したのか探るとともに、調査を通じた大旅行の教育上の意義についても迫りたい。

2．調査報告書執筆のための調査

2−1.清水董三からのアドバイス

「華北に於ける政治建設状況――新民会工作を中心として――」は、いかなる調査に基づいて作成されたのか。第七班の6人

がそれぞれ旅行中に書き記した「日誌」をもとにたどっていく。

1942 年 6 月 6 日午前 7 時頃、第七班はほかの班とともに、東亜同文書院大学の教職員と在校生の盛大な見送りを受けて大旅行に出発した。午前 8 時半、6 人は上海駅で華中鉄道の特別急行列車「天馬」号に乗車し、最初の目的地である南京に向かった。

午後 2 時過ぎ、彼らは南京に到着すると、大学の紹介状を持参して、市内にある支那派遣軍総司令部と南京防衛司令部を訪問した。戦時下での彼らの旅行は、現地日本軍の理解と協力なしには実現できなかったためである。しかし、このときどちらの司令部にも誰ひとりおらず、軍幹部にあいさつができないまま終わった[12]。

7 日午前 10 時頃、彼らはほかの班とともに南京日本大使館を訪れ、書記官で東亜同文書院の大先輩である清水董三が催した歓迎会に参加した。第 12 期生の清水は、書院卒業後、兵役をへて、同校で中国語教師として教壇に立った。その後、堪能な中国語が認められ、1929 年、外務省翻訳官に転じた。さらに、1934 年からは外交官として中国主要都市の日本大使館に勤務し、中国側との重要な交渉や、戦時下の日中和平工作にも携わった[13]。

清水は、このとき彼らに何を語ったのか。齋藤によると、清水は彼らを前に大旅行の注意として、「支那事情を本質的に把握する事」、「現在の支那の情勢は過渡的として変則的一時的なるが故に、之を以て直に支那の本質と見誤らざる事」、「現在発行されてゐる凡ての論文、文章、記事、ニュース等は真実を蔽ってゐる。故に我々は之等にまどはされる事なく事実を視察し、真実を掴む事」[14]の 3 点を伝えた。清水は長年の中国での経験から、彼らに目の前で変化する事象や、真実を隠したことばに惑わされることなく、中国の本質を捉えるようアドバイスをしたのである。

さらに、清水は中国政治の現状について、「蔣（蔣介石―引用者注）は国民のロボット化しつつあり、一方において支那国民全体の民族意識（主としてインテリ層を中心としてゐる）が支那の抗戦力の本質をなしつつある」[15]と述べ、日中戦争が長期化した背景に、中国国民の民族意識の高まりがあることを話した。これから中国の現地に入って調査に臨む彼らにとって、清水の話はとても参考になったであろう。立見は清水の話を聞き、「熱あり、意気あり、本当に後輩思いの先輩である。書院にせめてあれだけ学生思いの先輩が居ればと思ふ」[16]と、感激した気持ちを日誌に綴った。

その後、彼らは南京の満鉄調査課や日本陸軍南京特務機関にもあいさつに回り、9 日、南京を離れ、津浦（しんぽ）線に乗り北京へと向かった[17]。

その途上、福田は列車内に貼ってあった日本軍の伝単に目を遣った[18]。そこには「節省物資消費努力生産増加収回廃品開発資源完成自給自足以完成華北兵站基地的使命（河南省公署）」（物資の消費を抑え、増産に努める。廃品を回収して資源開発をし、自給自足を成すことで華北の兵站基地としての使命を達成する――引用者訳）と記されていた。これを見た福田は、「思はずハットした。河南省公署には目の開いた人間がゐないと見える。勿論華北には伝単に説かれてゐる通り兵站基地としての使命はあらうが、夫丈（それだけ）ではあるまい。もっと何とか書

き様がありさうなものである」と、批判した。早くも福田は、事実を覆い隠す文章にまどわされず、真実を捉えなければならないという清水のアドバイスを実践に移していた。

2−2.中国共産党に関心を向ける

12 日[19]、彼らは北京に到着すると、新民会中央総会（1940 年 3 月、中央指導部から改称）を訪問し、同会に勤務していた同文書院出身[20]の大石義夫[21]・味沢公勝[22]・今村鎮雄の計らいで、新民会の道場に寝泊まりすることを許された[23]。さらに、彼らは翌日から新民会調査室で報告書作成に必要な資料の書き写しも認められた。

このほか、彼らは北京在住の日本人識者を訪ね歩き、中国社会の現状について質問に回った。このとき、彼らに特に強い印象を与えたのが、新民学院教授の平等文成（びょうどうぶんせい）であった。

平等は、1929 年に東京帝国大学（現東京大学）文学部入学後、同大学生自治会長に就任し、仲間とともに社会運動に取り組んだ。卒業後、新聞記者をへて、1935 年、中国に渡り、河北省通州（現北京市通州区）の傀儡政権、冀東防共自治政府顧問に任じられた。日中戦争が始まると、興亜院華北連絡部に勤務し、その後、新民学院や北京大学で教鞭を執った[24]。新民学院とは、新民主義に基づいた官吏を養成する新民会が運営する教育機関である。

平等は、まもなく現地調査に入る彼らに対し、中国共産党の八路軍がいかに優秀であるか示したうえで、「我々は共産軍と四年間、政治闘争をしたが、結局大した成功を収め得なかった。如何なる点に欠点があるのか、よく調べてくれ」[25]と、語った。平等ら新民会は八路軍に対し、どのような政治闘争をしていたのか。

前述のとおり、新民会は綱領に反共戦線への参加を方針のひとつに掲げており、新民主義の普及を進めると同時に、共産主義を排除するための各種活動を展開した。例えば、北京では、1938 年 6 月に 13 日から一週間にわたり、剿共滅党運動[26]が実施され、教育者や地方人士が市内の学校や団体先を回って、防共に関する講演を行った。そして、「新民歌」や「新民体操」を考案して、共産主義に取って代わる新民主義の普及に努めた。

さらに、1940 年 3 月 8 日から北京特別市滅共運動[27]が開始され、新民会会員と中国人学生で組織された共産党撃滅隊が、5 日間に渡って市内中心部を回り、共産党に関する書籍を没収したり、共産主義を批判するビラの配布や映画の上映などを行ったりした。これには、北京特務機関や日本軍憲兵隊など、日本軍の協力を受けていた。

しかし、これらを実施しても、共産思想を排除するまでには至らなかった。新民会の対八路軍政策は、いったいどこに問題があるのか。平等はその解決のヒントを同文書院生に求めたのである。

このように問いかける平等を、彼らはどのように見たのか。福田は言う。「共産党研究者と云ふのも世の中には多いが、殊に中共に対して多くの研究者は、総て文献主義的共産党研究者であり、或は是を誇大視し、或は是を侮り真の中共の実態を把握してゐる人は少い。実際の調査と云ふものは直接敵地に入らねば決して出来るものではない。平等先生こそ実際の実学者であると思ふ」[28]。

中国の実態に真摯に向き合う平等の姿勢に、これから現地調査に赴く福田は、大いに感銘を受けたのであった。

2-3.初めての現地調査

6 月 21 日、彼らは平等ら新民学院側の招きで、引率教員と同学院生 11 人とともに、北京近郊の河北省昌平県（現北京市昌平区）での農村生活実態調査に参加した。中国農村の現地調査は、彼らにとって初めての体験であった。

田沼によると、調査は農村の生活のあらゆる面について記した調査表があり、これを持って農民に聞き取りをするという方法がとられた。しかし、実際に調査を始めてみると、「言葉がよくわからないので、新民学院の研究生に通訳してもらふ」と、中国語の問題で、作業が難航した。同文書院は中国語の授業が全学年毎週 11 時間あるという、徹底した中国語教育を施すことで知られていた[29]が、それだけ学んでも、彼らが不自由なく現地調査を行えるだけの語学能力を身につけることは難しかった。

しかし、齋藤は、「本調査は政治的なものの調査ではなく、純粋に農民の生活状態の調査なのであり、我々のテーマ（ママ）とは一応関係がないが、然し農民の生活状態の知識は我々のテーマ（ママ）調査の基礎となるものであるから、こうした調査に参加するのも別に無意味な事ではないのである」[30]と、現地調査を経験したことに意義を見出した。また、福田は、「昨日雨が降ったので老百姓は忙しい。彼等の生活は苦しい。働けど働けど窮乏に陥って行く彼等の姿。その原因は奈辺にあるか？」[31]と、調査によって、農民の置かれている現状を目の当たりにし、その原因に思いを巡らすきっかけを得たのであった。

彼らにとって、昌平県での体験は、このあと現地調査に入るうえで、非常に有意義なものとなった。

6 月 25 日、彼らは昌平県から北京に戻ったが、松城が調査中に病を患い、これ以上大旅行が続けられなくなったため、ひとり上海に帰った[32]。そして、田沼、立見、齋藤は、引き続き北京で調査を続けることになった。よって、山西省へは徳永と福田のふたりだけで向かうことになった。

2-4.山西省での現地調査

ここからは、徳永と福田の動向に着目し、山西省での彼らの調査の様子についてたどる。7 月 1 日（または 2 日）[33]、ふたりは鉄道に乗って、山西省東部の陽泉に到着した。そして、翌日から、北支那開発株式会社傘下の華北石炭販売股份有限公司[34]の計らいで、炭坑の現地調査に入った。

石炭の採掘現場を見学した福田は、次のように述べて、非効率な採掘方法を批判した。「石炭の質は頗る優秀である。併し如何にせん夫の採掘法にせよ、運搬法にせよ、非常に原始的であって、茲に内地と同様の機械的設備を施したならば、現在の二倍も三倍も効果をあげうると思はれる」[35]。

福田は、昌平県の調査のときでもそうであったように、直接見た中国社会の現状について、冷静で客観的な視点を崩さなかった。

炭坑の調査を終えたふたりは、次に臨汾に移動し、現地の新民会の協力のもと、合作社について調べ始めた。合作社とは、商品の生産から輸送、販売などを部門別に分

けられた小規模な組織をいう。

中国では1920年代より合作社運動が国民政府の国策のひとつとして推進された。合作社は、満洲事変以後、日本の中国侵略によって打撃を受ける。しかし、日中戦争勃発後、国民政府が日本の経済封鎖に対抗するため、戦火を逃れてきた農民や都市労働者を合作社に入れ組織化した[36]。

山西省の合作社は、日中戦争で日本軍が山西省に進攻すると、都市の商人が被害を受けるなど、いちじ活動の停滞を余儀なくされた。しかし、1941年春、山西省新民会が公益市場を改めて山西省合作社聯合会を組織し、合作社の立て直しを図った。同会は山西省の楡次（ゆじ）、陽泉、崞県（じゅんけん）、汾陽（ふんよう）、臨汾（りんふん）、運城、長治（ちょうじ）の7ヶ所に分所を置き、購買、販売、食料管理、金融、農業生産指導、検査、技術訓練の各分野に分かれて、住民の生活を支えるための業務を行っていた。

合作社聯合会の初代理事長は山西省長の蘇体仁（そたいじん）が就いたが、実権を握っていたのは、幹部を務めていた日本軍嘱託の身分を持つ新民会職員であった。また、同会が資金不足に陥ったときは、日系銀行から借款しており、財政面からも組織は実質的に操られていた[37]。

福田は、合作社を調査の結果、現地の治安が悪いにも拘らず、彼らが相当な成績を収めていることを確認した[38]。しかし、合作社聯合会が、事実上日本の傀儡となっていた実態までは、気づけなかったのである。

福田は、山西省での調査はもとより、大旅行を始めてから見聞したことについて、毎日およそ原稿用紙1枚以上にまとめ上げている。そこには、日々の行動の記録だけでなく、彼がその体験から分析した意見や批判などが細かく認められている。

一方、福田と行動をともにしていた徳永は、日々のできごとを毎日ほぼ2、3行端的に書くのみで、その日の感想や意見については、ほとんど記されていない。

しかし、7月23日の沁県での徳永の日誌は、これまでの2倍に及ぶ分量で記されていた。徳永は何に関心を持ったのか。その記述は次のとおりである。

「七、二三。先鋒隊を連れて討伐に出発。出発頃から雨が降り出す。吾々は馬に乗り約三百名の堂々の陣をはって行く。（引用者略）午後二時頃やっと最前線のトーチカにたどりつく。高粱ガラの上にアンペラを敷いて寝る。その夜は寒くがたがた震へ乍らねる」[39]。

先鋒隊（新民先鋒隊）[40]とは、新民会県総会次長の統率のもと、同会で選抜された優秀な中国人職員を隊長にして、特に治安の悪い地区に派遣された。そして、そこで治安の回復や新民主義の普及にあたった。山西省太原で先鋒隊の任務に携わった郡山襲夫によると、新民主義を広めるため、先鋒隊の機関紙として、中国語のタブロイド版一枚の週刊紙『先鋒』と、日本語の月刊冊子『新民戦士』を発行したという。

先鋒隊は、新民工作先鋒隊と新民武装先鋒隊に分かれていたが、徳永が同行したのは、その任務の内容から、おそらく後者であったと思われる。なお、このとき福田も徳永と行動をともにしていた。

徳永らは、7月30日と31日と2日間にわたり、ふたたび先鋒隊に加わり、彼らの動向について調査をしている。徳永は、「彼等の生活は規律正しく、工作には熱心である」、「実に彼らの工作には感心する」と、

先鋒隊に好意的な評価をした[41]。

これに対し、福田は、「先鋒隊宣撫の目的は、支那全体の新民色塗替へ、同時に先鋒隊員をして県警たらし去るにある。現在新民会は雑用多く、本来の工作をやる時間は少い。新民会は決して軍の〇〇機関ではない」[42]と、先鋒隊が事実上、県警備隊[43]の代わりとなっていることを批判した。

8月7日、ふたりは山西省大同から列車に乗り、北京を経由し、11日上海に戻った。そして、2ヶ月近くの大旅行の成果を調査報告書にまとめた。そこには何が書かれていたのか。

3．彼らは新民会をどう見たか

3−1.中国占領支配と新民会

彼らは新民会の何に着目したのか。報告書冒頭の「序」[44]（以下、括弧省略）を要約しながら分析したい。

序によると、日中戦争が長期持久戦に入るなか、日本軍が中国占領地域を支配するには、治安の確保と「民生の配慮」という政治工作、戦火で破壊された生産機構と生産設備の復旧、および資源開発という経済工作が必要であるという。

このふたつのうち、日中戦争初期において重要視されたのが経済工作であった。しかし、政治的安定を抜きにして経済工作は成功しないうえ、政治工作も戦争が長引くことで次の段階へと進んでいった。

次の段階とは何か。それは、日本軍の山西省進攻で生まれた政治的空白に入り込んだ中国共産党との新たな対決であった。序ではこのように述べている。

「陝西地区に蟠踞してゐた中国共産党は事変による北支よりの国民党勢力の敗退と共に積極的に山西、河北、山東方面に向って進出を開始した。そして、それは独自の工作により生産手段から投げ出された貧農、農村プロレタリアを糾合して、尨大な農民軍を組織し、その勢力は雪だるま的に増大して行った。（中略）こゝに従来観念的なものに過ぎなかった防共といふことは、現実的な問題にまで引下げられ、北支に於て新しき態勢の確立と強力なる政治力の結集が緊急問題となった」。

防共を実行するには、日本が山西省占領地の政治、経済、思想の各問題に取り組み、都市から農村へと支配を強化しなければならない。しかし、これにはある問題があった。すなわち、「而して先に中華民国臨時政府が樹立されたが、それは単なる旧勢力の寄せ集めに過ぎず、その内容、顔ぶれから見ても、かゝる革新的任務を果すには余りに旧時代的なものであった」。

日本軍が中華民国臨時政府を設立する際に協力を求めた政権参加者は、そのほとんどが国民政府に敗れた旧軍閥領袖やその関係者で、日本軍内からも、彼らの実力を疑問視する声があがった。しかし、日本軍が持つ人脈では、国民政府から実力のある要人を味方に引き入れることができなかった[45]。旧態依然とした顔ぶれが並ぶ組織では、防共という新たな事態に対応できないおそれがあった。

その状況にあって期待されたのが新民会である。「勿論、新民会もその成立当初にあっては、かゝる明確な意識を欠ぎ、単なる宣撫班的性格、或は支那浪人的無政策なものを多分に持ってゐたとは云へ、それらのものは工作の進展と諸状勢の逼迫とにつれて次第に淘汰されて行き、その性格も華北

の客観的状勢の変化につれて明確化され方向づけられて来たのである」。

以上を簡単にまとめると、報告書の主眼は、山西省における日本軍占領地の政治工作で、新しい問題として中国共産党の進出に対する防共を挙げている。これは、彼らが北京で平等のアドバイスをきっかけに中国共産党に関心を持ったことが反映されていたといえよう。また、臨時政府が旧態依然の体制であったと見抜いた点も、現状分析として正しい。

しかし、新民会については、同会が宣撫班と合併したことで、より日本軍主導となり、「宣撫班的性格」はかえって強化された。この新民会の実態にまで迫れなかったことに、この大旅行調査と彼らの分析の限界点があった。

3−2.体験を生かした先鋒隊工作の分析

次に、新民会の具体的政策の分析を見ていく。報告書で「当面に於ける新民会工作任務」として挙げたのは次の 3 点である[46]。「一、治安確保の為の自衛団の組織、訓練」、「二、民衆の政治力結集の為の分会の組織と指導」、「三、農村経済確立の為の合作の組織と指導」。ここでは、ひとつ目の問題に着目したい。ここでは先鋒隊について次の問題点を指摘している。

「先鋒隊の任務は、郷村に於ける新民運動の展開と、一方、県内武装団体（県警察隊）の政治化とである。即ち従来の県警察隊は質的に甚だ劣悪で、何ら政治的、思想的な訓練を受けて居ず、彼等が郷村に出掛けるや所謂旧支那軍隊と同じく、諸々の悪事を行ひ百姓達は、蛇蝎の如く彼等を嫌ってゐた。之が弊を除き、彼等に政治性を附与する為に、先鋒隊員を之が幹部に送り込み、一方、県警の幹部を先鋒隊中に於て訓練するのである」[47]。

彼らがこのような指摘ができたのも、福田と徳永が山西省まで行って先鋒隊に同行したからである。座学や資料収集だけではわからない、現地調査の重要性がここに現れていよう。

福田と徳永にとって、山西省の先鋒隊調査がよほど印象に残ったのか、報告書では、その体験をもとに、先鋒隊に次のような期待を込めた一文を綴っている。

「彼らは、概ね中農層の子弟であり、一方に於て自己の郷土を愛すると共に、従来の封建社会に対する純粋なる反感と改革の熱意と若さとを持つ。彼らは知識と文化とを求めてゐる。彼等に対して具体的方策と力を与へさへすれば、新中国の建設も難事ではないであらう」[48]。

しかし、このような過度の期待は、大旅行中に清水がアドバイスした、中国事情を本質的に把握すること、事実を観察して真実を捉えることを難しくさせる。新民会や先鋒隊の活動も、あくまで日本軍占領下という特殊な状況下でのことであり、その点を考慮した分析でなければならない。また、彼らの述べる「新中国」と、新民会や先鋒隊に所属する現地の中国人や、または中国民衆の思い描くそれと同じであるとは限らない。これもまた、この報告書の分析の限界点であろう。

3−3.合作社の問題点の分析

福田と徳永は、山西省で合作社の調査をしたが、その成果が報告書に反映されている。ここでは、「合作社を中心としての華北

経済政策上の諸問題」として、次の2点を挙げている。1点目は「合作社の転換」[49]である。

ここでは次のように論じている。合作社はもともと資本主義と対立する共同組合的なものであった。しかし、戦時下となり統制経済が行われたことで、組織の性格を共同組合から「全体主義的共同生活実践組織体」にまで高めて転換しなければならない。それは、華北の現実的要求であり、これにより華北の経済機構が大東亜共栄圏の一角として役割を果たすことになろう。

しかし、問題は合作社職員の多くが、合作社を単なる購入や販売を行う商業機構と考えていることである。現在、良い指導者を得た合作社が成功を収めており、優秀な指導者の育成が今後の課題である、と。

2点目は、「収買、配給機構の二元性」[50]である。ここでは次のように述べている。合作社は、県以下では、直接農民からの収買や配給に相当の成果を上げている。しかし、県以上の運輸、保管、製造、加工、販売の分野は、合作社の資金不足から、商社組合の協力を得なければならない。これにより、合作社は資金面で商社に隷属し、価格操作をされても防ぐことができない。これら状況から、「商社組合の資産と合作社機構の結び付け、利潤制限に基く公定価格の適正化、収荷、配給機構の一元化」が華北の経済政策に残された課題であろう、と。

以上の分析を見ると、「全体主義的共同生活実践組織体」とは、具体的に何なのかという用語の問題や、各論点のもととなる統計や証拠が充分に示されていないなどの問題点がある。

しかし、彼らがここまでの論証ができたのも、2ヶ月に及ぶ大旅行の現地調査があってのことであり、その点から、同文書院における教育の集大成として、大旅行の価値をここから見出すことができよう。

4．おわりに

本稿は、東亜同文書院第39期生第7班の大旅行の調査記録をとおして、山西省新民会の様相に迫った。彼らの調査報告書によると、山西省では先鋒隊が住民から忌避された県警備隊の任務を事実上代行している実情が明らかとなった。また、合作社については、華北経済機構が大東亜共栄圏の一角をなすため、優秀な指導者の育成が課題となっていること、商社組合との隷属関係を是正するため、公定価格の適正化と収買、配給機構の一元化が必要であると論じた。

彼らのこの詳細な分析は、2ヶ月に及ぶ大旅行での調査を根拠としたが、そのなかには、関連資料の収集だけでなく、現場の見学や現地での関係者への聞き取り、さらには、行く先々で彼らを迎え入れた書院OBや日本人識者の協力やアドバイスがあった。特に彼らに影響を与えたのが、清水董三と平等文成のことばであった。清水は彼らに中国の本質を捉えるよう助言し、平等は彼らの関心を中国共産党へと向けさせた。彼らが大旅行の末に作成した報告書には、ふたりのアドバイスが反映されていた。

彼らの調査では、山西省新民会のほんの一部を探ったのみで、決して満足のいく分析ではなかった。しかし、調査の過程での様々な体験は、彼らを人間的に成長させたといえる。ここに、大旅行調査の教育上の意義を見出すことができよう。

[1] 満洲事変以降に日本軍が中国大陸に建てた傀儡政権の概要については、広中一成『20 世紀中国政権総覧 Vol.1　ニセチャイナ　満洲・蒙疆・冀東・臨時・維新・南京』、社会評論社、2013 年を参照。

[2] 以下、新民会の概要については、前掲書 271−278 頁を参照。

[3] 堀井弘一郎「新民会と華北占領政策」上・中・下、『中国研究月報』第 539−541 号、中国研究所、1993 年 1−3 月、1−20 頁（上）、1−13 頁（中）、1−6 頁（下）。

[4] 菊池俊介『日本占領地区に生きた中国青年たち　日中戦争期華北「新民会」の青年動員』、えにし書房、2020 年。

[5] 広中一成「中国における華北「傀儡」政権史研究の現状―二冊の研究書から（郭貴儒・張同楽・封漢章『華北偽政権史稿――従“臨時政府”到“華北政務委員会”』、劉敬忠『華北日偽政権研究』）」、『中国 21』Vol.29、東方書店、2008 年 3 月、265−272 頁。

[6] 郭貴儒『河北淪陥区偽政権研究』、人民出版社、2013 年。

[7] 藤田佳久『日中に懸ける　東亜同文書院の群像』、中日新聞社、2012 年、97−98 頁。

[8] 同上、48 頁。

[9] 同上、130−131 頁。

[10] 第七班福田經・徳永速美・立見章三・田沼菊彌・齊藤忠夫・松城弘「昭和十七年度　大旅行調査報告書　華北に於ける政治建設状況――新民会工作を中心として――」、国家図書館編『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』第 188 巻、国家図書館出版社、2016 年、407−469 頁。

[11] 第七班員の日誌は、国家図書館編『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』第 69 号、2016 年、129−349 頁に収められている。これらを本稿で用いる場合、タイトルに班員の名字を示して誰が書いたものかわかるように表記する。すなわち、松城弘は「松城日誌」（同書、129−139 頁）、田沼菊彌は「田沼日誌」（同書、143−174 頁）、立見章三は「立見日誌」（同書、175−222 頁）、徳永速美は「徳永日誌」（同書、223−242 頁）、齋藤忠夫は「齋藤日誌」（同書、243−289 頁）、福田經は「福田日誌」（同書、291−349 頁）である。

[12] 前掲「田沼日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、145 頁。

[13] 大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史――創立八十周年記念誌』、滬友会、1982 年、382−383 頁。

[14] 前掲「齋藤日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、246−247 頁。

[15] 同上、248 頁。

[16] 前掲「立見日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、179 頁。

[17] 津浦線は、南京から長江を渡って対岸にあった浦口から天津までを結ぶ鉄道路線である。天津から北京に向かうには京奉線（北京−奉天〔現瀋陽〕）に乗り換える必要があった。

[18] 前掲「福田日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、300 頁。

[19] 徳永と立見は、北京に向かう途中で立ち寄った山東省済南で、同地の新民会省総会に赴き、彼らの活動の様子を聞き取っている（前掲「立見日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、182 頁）。

[20] 新民会に所属していた同文書院出身者は

次のとおり。河野繁（第 19 期）、波多江種一（第 20 期）、大石義夫（第 25 期）、中下魁平・長友利雄・土田増夫（第 26 期）、左近充武夫（第 27 期）、田中辰一・大橋貞夫・宇野正四・土谷庄八郎（ともに第 28 期）、井ノ口易男・熊野茂次・角田正夫・高石茂利（ともに第 30 期）、篠倉良雄・鹿谷儀惣人（ともに第 31 期）、下雅夫（第 32 期）、山内実・植松義一（ともに第 33 期）、武富二郎・道下福四郎・味沢公勝・伊藤義三・今村鎮雄（ともに第 34 期）、横尾隆幸・小野荘太郎・妻木辰男・増崎依正・本土敏夫・古屋鉄衛・近光毅（ともに第 35 期）、松木鷲・鴨沢二郎（ともに第 36 期）、柏村久雄・百瀬竹男（ともに第 37 期）、阿部弘（第 38 期）など（前掲『東亜同文書院大学史』、352–353 頁）。

21 大石は、1938 年春に新民会職員となり、冀東道指導部の開設に携わる。その後、中央総会組織科副科長、中央総会参事、冀東道首席参事、河北省総会参事、河北省合作社顧問などを歴任した。戦後は故郷の佐賀県三養基郡上峰村（現上峰町）で公選村長を一期務め、村長退任後は、三養基高校教諭に転じた（岡田春生編『新民会外史　黄土に挺身した人達の歴史』前編、五稜出版社、1986 年、102 頁。なお、大石は新民会に務める前、河北省通州（通県）に成立した傀儡政権、冀東防共自治政府の宝坻県政府顧問に任じられていたが、同政府に勤務した同文書院出身者には、このほかに三島恒彦（冀東銀行顧問、第 18 期）、斎藤正身（北戴河検査所顧問、第 20 期）、村主正一（遵化県政府顧問、第 23 期）、上西園操夫（保安第三総隊顧問、第 25 期）、長友利雄（通県政府顧問）、上田駿（楽亭県政府顧問、第 26 期）、中下魁平（薊県政府顧問）、田中辰一（遷安県政府顧問）、米倉俊太郎（順義県政府顧問、第 29 期）、奥田重信（冀東政府顧問、第 31 期）などがいる（前掲『東亜同文書院大学史』、352 頁）。

22 1942 年 12 月現在の「新民会日系職員名簿」によると、味沢は 1941 年 4 月より燕京道平谷県で新民会の首席参事を務めていた（岡田春生編『新民会外史　黄土に挺身した人達の歴史』後編、五稜出版社、1987 年、315 頁。味沢は、1940 年 3 月に新民会が組織改編されると、今村鎮雄らとともにこれに異を唱えた。そして、新民会副会長に就任した予備役陸軍中将の安藤紀三郎に連盟血判状を提出し、新民会の自主性と中国民衆の意思を尊重することや、新民会の運営に日本軍を介入させないことなどを要望した（味沢公勝「軍と衝突して去る」、同書、25–26 頁）。

23 齋藤によると、道場では連日連夜の猛暑と南京虫に襲われたため、同文書院の別の先輩を頼って、16 日から市内の古川公司の宿舎に宿泊した（前掲「齋藤日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、254 頁）。

24 終戦後、平等は日本に帰国し、長野県軽井沢で高冷地農業に取り組む傍ら、開拓地に農業学校を開き、青年教育を実践した。さらに、日本農民組合長野県連合会会長、全日本農民組合中央常任委員、同国際部長などを歴任し、1967 年、日本社会党から衆議院議員選挙に立候補し、当

選した（一期）。1970 年 12 月死去（八百板正「激動の歴史と生涯を共にした平等文成君逝く」、『月刊社会党』2 月号、日本社会党機関紙局、1971 年 2 月、122−125 頁）。

[25] 前掲「田沼日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、152 頁。

[26] 「市公署奉発中指部“剿共滅党実施大綱”及会旗説明」（1938 年 6 月 11 日）、北京市檔案館編『日偽北京新民会』、光明日報出版社、189−191 頁。

[27] 「北京特別市滅共運動実施要領」（1940 年 3 月）、同上、206−207 頁。

[28] 前掲「福田日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、306 頁。

[29] 前掲『日中に懸ける　東亜同文書院の群像』、100 頁。

[30] 前掲「齋藤日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、258−259 頁。

[31] 前掲「福田日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、312−313 頁。

[32] 「松城日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、138−139 頁。

[33] 陽泉到着の日にちについて、「徳永日誌」（『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、230 頁）、は 7 月 1 日、前掲「福田日誌」（同、317 頁）は 2 日と、1 日のずれがある。これについては、特に本章を検討するうえで重要ではなく、また日にちを確定できる術がないので、差し当たり、徳永の記述に従う。

[34] 北支那開発株式会社は、1938 年 11 月、華北日本軍占領地の経済開発を目的に設立された（槐樹会刊行会編『北支那開発株式会社之回顧』、槐樹会刊行会、1981 年、3 頁）。資本金は 3 億 5000 万円で、その半額を民間が出資する半官半民の企業であった（同、9 頁）。関連会社は五十数社に及んだ（同、2 頁）が、そのうち、華北石炭販売股份有限公司は、1940 年 10 月 30 日に資本金 2000 万円で設立された。同公司は、北支那開発株式会社成立以前に華北開発を行っていた興中公司の石炭販売事業を継承し、山東炭銷と蒙疆鉱産取扱炭を除く、華北産炭の買い取り販売と輸移出などを行っていた（同、53 頁）。福田は、北京滞在時に華北石炭本社に挨拶に訪れていた（「福田日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、317 頁）。

[35] 同上、319 頁。

[36] 吉沢南「総論」、野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史　第 6 巻』、東京大学出版会、1978 年、6−8 頁。

[37] 侯亮亭「偽山西省合作社聯合会前後」、山西省政協文史資料研究委員会編『山西文史資料　第 12 輯』、山西人民出版社、1982 年、137−143 頁。

[38] 前掲「福田日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、326 頁。

[39] 前掲「徳永日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、234−235 頁。

[40] 郡山襲夫「山西省新民先鋒隊」、前掲『新民会外史』後編、174−176 頁。

[41] 前掲「徳永日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、237 頁。

[42] 前掲「福田日誌」、『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』69 号、342 頁。

[43] この県警備隊は、日中戦争勃発後、日本軍占領下の山西省で組織された。1943 年、

同隊は改編され、5 個中隊以下を警備大隊、2 個中隊を警備団とした。さらにその後、警備大隊が保安大隊、警備団が保安聯隊に再改編された（達磨純「1945 年的日偽保安聯防区」、山西省政協文史資料研究委員会編『山西文史資料　第 56 輯』、山西人民出版社、1988 年、176 頁）。

[44] 前掲「昭和十七年度　大旅行調査報告書　華北に於ける政治建設状況――新民会工作を中心として――、国家図書館編『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』第 188 巻、国家図書館出版社、2016 年、411−419 頁。

[45] 前掲『ニセチャイナ』、263−266 頁。

[46] 前掲「昭和十七年度　大旅行調査報告書　華北に於ける政治建設状況――新民会工作を中心として――」、国家図書館編『東亜同文書院中国調査手稿叢刊』第 188 巻、国家図書館出版社、2016 年、420 頁。

[47] 同上、421−422 頁。

[48] 同上、447 頁。

[49] 同上、457−458 頁。

[50] 同上、458−459 頁。